

白山ふるさと文学賞

第十三回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」または「家族へのおもい」〉

小学生5・6年の部 優秀賞

「兄の存在」

北陽小学校六年

池田

優美子

あれは六年生になる前の春休み。楽しみにしていた親友達との約束の時間が近づいていたので、待ち合わせ場所近くまで母に車で送ってもらった時のことです。停車した車から降りたしゅん間なみだが止まらなくなりました。次から次に出てくるのでどうしていいのかわからなくなりました。こんな事は初めてでした。ただ、心がカラッポのようなきみしい気持ちでいっぱいになりました。理由は分かっている。明日の朝、兄が県外の大学に進学のため出発するから。三月の始めごろの合格発表からの数週間、家の中は一気にあわただしくなり、私も「お兄ちゃんが県外に行ってしまうんだ。」と何となく頭では分かっていたけれど、明日にせまってくる。「本当に行っちゃうんだ。」と現実味を感じたのです。

集合時間に集まった友達から「えっ？どうした、目赤いね。」と聞かれたので理由を伝えると「そうなんやね。」と言われたけれど、弟が二人いる子とひとりっ子の友人にはいまいピンとこないのは仕方がないことだと思っただし、二人と過ごした楽しい時間のおかげでも少しさみしさがまぎれたのであの時は本当に良かったです。

クラスの友達や学童の人たちからはいつもおどろかれるけれど、七学年の年の差がある兄と一度も言い争ったこともケンカしたこともないのは、きつと兄が私の行動全てを優しく受け入れてくれるからだと思います。私にはそれが当たり前だと思っただし、周りの友達の兄弟ゲンカの話や目の前で起こるケンカに毎回ドキドキしてしまっています。

兄がお友達の兄弟と遊ぶことが増えた年中さんのころから、「いつかぼくの家に妹が来てほしい。」
「いつかぼくの家に妹が来てほしい。」
と言いつつ続けていて、母のお腹に私が居るのを知った時はとてつもなく喜んでくれていたそうです。産院の先生にも自分から出産の立ち合いやへその緒を切らせてもらおうのをお願いし、出産の本もくり返し読み、毎日お腹に話しかけて、私が生まれた四月七日の夜十一時五十八

分にもしつかり立ち合い、次の日の八日には一日中「本当に夢みたいだねー。」と言いつつ、九日の朝には産院から母と一緒に小学校の入学式に出かけ、入院中も退院してからも、お友達と遊んでいる時も「ぼくの赤ちゃん。」とみんなに紹介していたそうです。

だから、私は生まれた日からずっと兄と一緒に、いつも何気なく会話したり、同じことで笑い合ったり、私が困っているとさり気なく助けてくれる兄が、合宿みたいに数日留守にすることはあっても、ずっと家に居ない状況というのが想像つかなくて、さみしくて。改めて、「私に安心感をあたえてくれる人だったんだな。」と気付きました。

私の目に映る兄は、さり気なく周りに親切で、差別がなくて、自分より人を優先したり相手の気持ちを考えた行動をしていて、家族を大切に、私に分かりやすいように勉強を教えてくれて、様々なことに付き合ってくれて、初めての事にも挑戦する勇気があって、最後まであきらめずにがんばって努力し続ける力があって、でも、たまに抜けているところもあって、周りからかわいがられている人です。

そんな兄と過ごしてきた私が、特に兄をまねして身に付けたいと思うのは、ドキドキしたりいやなことがあっても気持ち切りかえて次に進む行動力です。

小学生の私には分からない中学校や高等学校の生活の中で、兄は勉強や部活以外にも色々なことに挑戦してきました。だから、大学進学で石川県からはなれ、一人暮らしをスタートし、知らない環境で学校へ通い勉強し、サークルや部活で全く知らない人たちと関わり交流してたくさん初めての事にチャレンジしている話を聞くと、兄が私の側から居なくなると数ヶ月。さみしさはまだ消えませんが、今は「がんばっているな。すごいな！応援してあげたいな。」という気持ちでいっばいになっています。そして「私もお兄ちゃんみたいに色々なことにならばいいな。」と強く思うようになりました。

これから先、兄が大学を卒業し、もし石川県以外の場所で仕事をす

るようになって一緒に住むことが無くなったとしても、兄が困った時には支えてあげられる妹になっていけるように私も成長していきたいと思っています。

兄が私の兄でいてくれること、元気で存在してくれることに本当に感謝しています。

